

# 選 挙 公 報

2010年10月19日  
総長選挙管理委員会  
委員長 市川 正人

総長選挙実施についての申し合わせ第2号にもとづき、下記の総長候補者による所信表明を公表します。

## 記

総長候補者 氏名 (50音順)	飯 田 健 夫
	川 口 清 史
	坂 根 政 男
	谷 口 吉 弘

総長候補者の所信表明は別紙のとおり。

以上

《総長候補者所信表明》

The opinion to be the Chancellor by Chancellor Candidate

【候補者 Candidate】

所属 Affiliation	総合理工学院情報理工学部	職位 Job Title	副総長
フリガナ 氏名 Name	イイダ タケオ 敬田 健夫		
年齢 Age	70歳	学位 Degree	学術博士（筑波大学）
研究分野 Research Field	感性工学 人間工学 感覚生理学		

【所信表明 The opinion to be the Chancellor】

(\* 日本語の場合は 2,000 字以内 / In English, within 650 words)

私が、総長候補者に推薦されてから、次の総長に求められる要件について熟考いたしました。まずは、立命館憲章に盛り込まれた理念に基づき、R2020 計画の具体的施策と実行におけるリーダーシップの発揮、そして何よりも、「教学優先」の立場を貫ける強い意志と「全構成員自治」に基づくバランスのとれた実行力を持つ人物が、最も次の総長に相応しいと再認識いたしました。

また、総合学園・立命館として、校友・父母を含めた全体の一体感を醸成できる人望ある人物が求められています。同時に、国内外の機関、大学との対外的な交流、交渉において、的確な判断ができ、社会環境に対する鋭敏な感覚とバランスを持った思考を有していることが、今後の学園を代表する総長には求められます。

このような総長像に対し、私の現在の心境を述べておきたいと思います。私は現在副総長を務めておりますが、学園在籍は短く、また 2006 年に一度退職し数年間学園中枢から離れていました。役職として学園に復帰後数ヶ月の私には、学園の歴史やこれまでの取り組みに明るくなく、本学に課せられた諸課題を遂行する能力は、残念ながら持ち合わせていないというのが率直な思いです。私を推薦していただいた教職員の皆様に対し大変失礼な発言かも知れませんが、正直なこの気持ちを察していただければと思います。

以上が、総長候補者としての私の基本的スタンスですが、この場を借りて日ごろ私が感じていることを 2、3 述べたいと思います。

まず、立命館は一学園にとどまらず、その一挙手一投足は、全国の教育研究機関が注目しているという社会的な影響を十分に考慮することが大切です。従って、「教学優先」の立場を貫くことはもちろんのこと、研究面においても、また大学の大きな使命のひとつである社会貢献・地域貢献にも積極的に関与することが大切であると考えます。

次に、いま新キャンパスについて議論が進められていますが、ここでは是非々々を述べるのは差し控えたいと思います。その理由は、総長候補者がこの新キャンパス取得の賛成派と反対派とに別れ、その部分が大きくクローズアップされた選挙は適切ではないと考えるからです。全構成員による新キャンパス展開の議論は高く評価でき、その過程で不明な点多々指摘され検討が行われています。しかし「全員の合意」は、これだけ大きな組織では事実上不可能であり、どこかの時点で決断しなければならないと考えます。結果として意にそぐわない結論が出ても、学園の一体性は保持され、学園の活性化を減じる要因とならないと考えます。

さらに学園はいま、学園は2つの環境要因から未曾有の危機にさらされていると思います。ひとつは、外的環境です。昨年、自民党から民主党へ政権交代しましたが、より一層の国民目線、政策の可視化が問われています。そういった点から私学助成も今後社会貢献できる大学か否かが大きな判断材料となり、私学にとってますます厳しい時代となるでしょう。

次に内的環境ですが、学園執行部と教職員間の「信頼回復」の問題です。双方が努力していることは理解していますが、双方がいつまでも不信感を抱いていることは、学園の発展・将来にとって大きなマイナスです。まず、この課題について双方が歩み寄り、全力を挙げて民主的な対話により解決する必要があると強く認識しています。

教育研究機関で、相互不信や組織の対立が発生したとき、一番の被害者は学生であることを忘れてはいけないと思います。

最後に、私がお約束できるのは、現常任理事会において設定している、前出課題を含む様々な諸課題を引き続き、丁寧かつ着実に進めていけるよう、私の任務を遂行していくことです。

以上、拙い内容ですが、私の所信表明とさせていただきます。

※この届出用紙は、総長候補者公示の際に、公報として原紙のまま掲載いたします。

《総長候補者所信表明》

The opinion to be the Chancellor by Chancellor Candidate

【候補者 Candidate】

所属 Affiliation	政策科学部	職位 Job Title	教授
フリガナ 氏名 Name	カワグチキヨフミ 川口清史	川口清史 Signature	
年齢 Age	65歳	学位 Degree	博士（経済学）京都 大学
研究分野 Research Field	経済政策・経済事情		

【所信表明 The opinion to be the Chancellor】

(\*日本語の場合は2,000字以内/In English, within 650words)

総長候補者に推薦いただき、光栄に思っております。  
 今次の総長選挙は、立命館で学び活動するみなさんと、私たちの拠り所や未来について語り合えるこのうえない機会であると考えています。  
 最も困難な時期を乗り越え、私たち立命館には今、ようやく前に向かって進むべきときがきました。

1. 総長職の二つの役割

私は総長には大きく言って二つの役割があると考えます。

第一に、学生・院生・生徒・児童、教職員といった学園構成員、父母、校友等学園を支援くださる方々の願いや要求をしっかりと理解し、その実現の先頭に立つことです。総合学園となった立命館においては、願いや要求も多様であり、総長にはそれらを自ら理解することどまらず、それぞれがお互いを理解しあい、立命館としてのアイデンティティを持つことを進める役割が求められます。

第二に、総長は学園を代表して、国内外の政治、行政、産業界、マスコミ等に対して、発言し、行動するという対外的な役割を有します。この役割のひとつは社会の動向、要請をいち早く把握して学園構成員に伝え、構成員の要求と結び、政策化と実現の筋道をつけていくという面です。そしてもうひとつは、学園の現状や発展方向を発信し、学生の成長、学園の発展につながる政策の実現を進め、立命館のプレゼンスを国内外で高めていくという面です。

2. この4年間を振り返って

私の総長就任は、大変厳しい環境の中であり、私の総長としての仕事はまず、学内の不信・不和を克服することから始まりました。みなさんと常任理事会の真摯な取り組みにより、学内の信頼回復は大きく前進していると考えています。今次の総長選挙がこうした取り組みの到達点として、学園をあげて進められていることを心よりうれしく思います。

しかし、道はまだ途上にあります。この間のありようについては、学生のみなさんからも厳しい指摘をいただいています。私は責任者としてこの4年間に学んだことを深く胸に刻み、学園創造に取り組んでいくことを決意しています。

こうした中でも、学園の教学は教職員、学生諸君の奮闘によりしっかりと前進してきました。新たな教学分野確立と前進、既存教学分野の改革の取り組み、開学10周年を機に改革を進めるAPU、一貫教育の前進、小学校の完成と高い社会的評価、3つのGCOEとR-GIROの展開など多くの前進がありました。とりわけ学生諸君の奮闘は目覚しく、難関分野での全国的な高水準の定着、スポーツ・学術・文化分野での国内外における活躍など、学園の構成員と全国の校友・父母を励ましてきています。

もちろん、多くの課題も生じてきています。これまでも私は、全学の意見を聞きながら改革を進めてきましたが、今、さらに、学生の声を正面から受け止め、学生の成長をなによりも大事にしながら前進しなければならないと考えています。

### 3. これからの立命館をどうつくっていくか

今、立命館は2020年を目標とする学園ビジョン、そして新中期計画を、多くの教職員の参加、そして学生の意見を聞きながら進めています。この新中期計画を策定し、その着実な実践の先頭に立つことが、新しい総長の最大の責務だと考えます。その上に、私はとりわけ、立命館学園が「学びのコミュニティ」として発展していくことを強く望み、また努力したいと考えています。

教育は世界的に、「教える」場から「学び」の場への転換が課題となっています。すでに立命館は「学習者主体」の教学改革に取り組んでいます。新中期計画の議論は「質の向上」と「ゆとりの創出」を軸に、それをさらに発展させるものです。学びのコミュニティの実現には、教学システムや教職員体制ばかりでなく、ラーニングコモンズなどの施設やキャンパス条件の整備が不可欠です。現在論議しているキャンパス創造はまさにその意味で実現を図っていかなければなりません。そして重要なことは、このコミュニティが世界に開かれた多様性に満ちたものでなければならない、ということです。変化の激しい時代だからこそ、多様性の中で鍛えられ、多様性の中から新しい道を見出すことのできる人間が育っていかなければなりません。

立命館学園の「学びのコミュニティ」としての発展は、必ず、全国の、さらには国際的な教育改革への大きな励ましとなるでしょう。全学の叡知を結集すれば、こうした未来を作り出すことができると私は信じています。

教職員のみなさん。私たちの目の前には、日々成長を遂げたくましく活躍する学生・院生・生徒・児童がいます。今、私たちがやるべきことはただひとつです。あらゆる改革を学生の成長と結び、学生の学ぶ意欲に応えるために、全学で一丸となって前進しなければなりません。

立命館で学び、活動する喜びを学生たちに実感してもらうこと。みなさんとともに未来をつくる先頭に立つことが、総長の最大の役割であると私は考えています。

※この届出用紙は、総長候補者公示の際に、公報として原紙のまま掲載いたします。

《総長候補者所信表明》

The opinion to be the Chancellor by Chancellor Candidate

【候補者 Candidate】

所属 Affiliation	立命館大学 総合理工学院理工学部	職位 Job Title	教授 総合理工学院副学院長 理工学部長
フリガナ 氏名 Name	サカネ マサオ 坂根 政男 坂根政男		
年齢 Age	62歳	学位 Degree	工学博士（立命館大学）
研究分野 Research Field	材料力学（多軸応力下における高温機器の信頼性評価法）		

【所信表明 The opinion to be the Chancellor】

(\* 日本語の場合は 2,000 字以内 / In English, within 650 words)

今回の総長選挙における、私の所信を述べます。

まずは全ての出発点となる、私がめざす学園像です。立命館は、立命館大学、APU、5つの附属校から構成される総合学園ですが、私は、それぞれの学校が、学生・生徒・児童の生き生きと学ぶ場となり、正課・課外を通して確かな学力を身につけ、人間的な成長を実感できる学園であるべきだと考えています。そして、先生方の教育と研究が生き生きと進められ、職員の方々の各職場での創意と工夫が着実に実践できる職場風土が醸成された学園であるべきだと思います。そのためには、教育や研究の現場を大切にし、現場からの意見が最大限に尊重される学園運営が必要です。私は、こうした自己発展的な取り組みで立命館らしい国際的にも個性を有した学園像を実現できると確信しています。

しかし、立命館の現状を直視すると、私のめざす学園像を実現できるような状況には必ずしもないことに、深い危惧を覚えています。とりわけ過去5年間に、立命館に生じた様々な事柄を振り返ると、真に学生・生徒・児童、そして教職員の立場に立った学園運営を貫けていたのかという点について、大きな疑問が残ります。具体的には、一時金問題や最近の新キャンパス問題が典型例として挙げられると思います。私は、学園運営の基本原則に立ち返り、これまでの経緯を検証し、今後の民主的な運営のあり方を検討し、新総長がリーダーシップを発揮して実践していく必要があると考えています。

次に、私が重点であると考える5つの学園課題について述べます。

第一は、新キャンパス問題です。学園の各キャンパスについては、日常的な改善視点が必要ですが、特に衣笠キャンパス狭隘化の改善については、全学的な認識が一致していると思います。しかし、そのことが、茨木での大規模キャンパス取得という結論に直結するのかという点については、慎重な判断が必要だと思っています。つまり、キャンパス取得が先行するのではなく、衣笠狭隘化の改善や今後の各学部の教学改革議論を受けて、学園の財政力量に見合った新キャンパスの合意を丁寧に議論すべきです。現在の常任理事会に

において、私は、学園の将来に責任を負う学部長理事として、一貫してこうした問題点を指摘する意見を発信しています。

第二は、新中期計画の具体化に向けた全学の教学改善課題です。新中期計画の各委員会では、2020年に向けた改革の最終案の取りまとめが進められています。本来はこの議論の全学討議を受けて、それを各学部の教学改革へ具体化していく必要があります。その後、各教学改革案に対する優先順位化と財政的な裏付け作業を行い、可能なことから順次実行に移すべきだと考えています。そして、併行して、衣笠の狭隘化の解消、教学改革や学生の課外活動等を支える施設整備の諸条件等を総合的に勘案した議論が展開され、適切な新キャンパスの具体化を判断することになると思います。

第三は、学費問題です。新中期計画を支える財政課題においては、学費のあり方の議論が避けられません。私は、現在の学費および奨学金政策は見直されなければならないと考えています。そのためには、あらゆる学内外の状況を勘案した総合的な検討が必要ですが、少なくとも次年度を待たずに、学費問題について早急に議論のできる準備を開始したいと考えています。学費水準に関して、どれだけ改善努力が可能かについて、同時に精査したいと考えています。奨学金政策も、成績優秀者の奨励とともに、高等教育の機会を保障する観点からすれば、経済支援重視の奨学金拡充が必要であると考えています。

第四は、APUの課題です。開学10周年で高い到達点を築いたAPUは、学園の貴重な存在であり、その強みを学園全体で積極的に活かして国際化を推進することが、APUの発展をも切り拓くと思います。一方、近年は志願者動向を含めた競争的環境の激化が進行しており、優秀な国際学生や国内学生の確保に一層の努力と工夫が求められています。私は、今こそ、学園全体の力とAPUの力を結びつけて、国際社会で活躍できる人材育成をさらに強めていくことが重要であると考えています。

第五は、附属校の課題です。私は、6500名を超える児童・生徒の学びと成長に責任を持ち、日本の初等中等教育の先進を拓く附属校教育の充実が、学園にとって重要な教学課題だと理解しています。これまでの附属校政策は、大学の規模拡大を入試の志願者構造から支える側面が相対的に重視されており、高大接続教育の充実や双方の教育の質を高めるといった視点がやや弱かったと思います。私は、これまでの一貫教育における児童・生徒・学生の学びと成長の実態と課題を全学で共有していく必要があると思います。また、学園の附属校政策の位置付けを高めるために、附属校関係者の学園運営への参加のあり方が、具体化されるべきだと考えています。

以上

※この届出用紙は、総長候補者公示の際に、公報として原紙のまま掲載いたします。

《総長候補者所信表明》

The opinion to be the Chancellor by Chancellor Candidate

【候補者 Candidate】

所属 Affiliation	立命館大学 総合理工学院生命科学部	職位 Job Title	特別招聘教授 総合理工学院長 生命科学部長
フリガナ 氏名 Name	タニグチ ヨシヒロ 谷口 吉弘 		
年齢 Age	68 歳	学位 Degree	工学博士（立命館大学）
研究分野 Research Field	物理化学、高压化学、生物物理学		

【所信表明 The opinion to be the Chancellor】

(\* 日本語の場合は 2,000 字以内 / In English, within 650 words)

今、立命館学園で学ぶ学生・生徒にとって学びがいがあり、立命館学園で働く教職員が教えがい・働きがいがあり、社会に支持され、また、高く評価される学園作りのために、全学構成員の英知を集めて、全力で取り組んでいる学園ビジョン「R2020」は、立命館憲章に基づき、日本や世界での高等教育事情を見通した、国際的にも通用性を有することが必要です。この学園ビジョンの実現には、全学構成員の協力なくしては実現不可能で、とりわけ、一つの目標に向かって教職協同を通して力を合わせるこゝがなによりも重要だと考えています。

学園ビジョン[R2020]の前半期に相当する 2015 年を目途に、立命館学園が、取り組むべき重要課題は、あらたな地平を切り開く教育・研究の展開とそれを保障する人的かつ教育研究環境条件の整備と「ゆとり」あるキャンパスの実現に着手することです。

教育の展開では、各学部・学校において、小中高大院の一貫教育である総合学園の強みを活かし、広く日本や世界の地域から支持され、またその要請に応えられる学びの仕組みの構築です。このためには、初年次教育を強化するとともに、国際的視点に照らして、それぞれの分野における専門知識とその技術の習得に加えて、不透明、不確実な時代を生き抜くための高い教養と倫理観の育成です。厳しい競争社会で活躍できる学生を育てるには、確かな専門知識のうえに、国際社会で通用する高いコミュニケーション能力の育成が何より必要で、立命館大学が長年取り組んできた小集団教育を卒業研究にまで展開して、一層の充実を図る必要があります。教育にける国際化の視点は避けて通れない課題です。G-30 に代表される国際化の課題は、立命館アジア太平洋大学（APU）にその先例を学び、APUとの連携を強化する中で、国際化におけるリーディング大学を目指すべきでしょう。

研究は、大学院生や若手研究者を巻き込んだ重層的かつ戦略的研究政策により、世界的な研究へと展開することです。そもそも研究は、研究者個人の自由な発想に基づいておこなわれるべきものであり、研究者個人への研究基盤整備の立場から、科学研究費獲得のための研究者個人への支援の強化は大学評価の観点からも重要です。また、わが国の発展にとって必要な国家戦略プロジェクトを研究政策に取り入れ、いち早く対応することが求められます。立命館大学で展開している G-COE や R-GAIRO などの活動は高く評価でき、研究成果を世界に向けて発信できる大学院教育と連動して更なる発展を図る必要があります。また、社会的に広い支持基盤を有する立命館大学の強みをもとに、外部資金の獲得とともに産学連携による研究力の一層の向上をはかり、社会の期待に応えることが求められます。

これらの教育研究の展開には、ソフトとハードの側面から、「ゆとり」ある環境整備が必要です。まず、教員当たり学生比率(ST比)の改善は優先されるべき課題です。1994年以降、BKCへの理工学部とそれに続く経済・経営学部の移転により、衣笠キャンパス、BKCとも、「ゆとり」あるキャンパスとして生まれ変わるはずでしたが、その後の新設学部と大学院の展開により、食堂問題をはじめとして教育研究の物理的環境条件はきわめて厳しい状況にあります。今後、学習図書館構想とキャンパスアメニティの向上を視野に入れた教育研究環境の改善は必要不可欠で、とりわけ衣笠キャンパスにおける狭隘化は学園ビジョン「R2020」の前半期に解決しなければならない課題です。

学生・生徒の学びとともに教職員が「ゆとり」をもって教えがい、働きがいのある学園を創造するためには、ハード面の改善の取り組みもさることながら、教職員が「ゆとり」ある時間を生み出しうる仕組み作りに取り組む必要があります。学園政策へ全構成員の意見の反映を担保したうえで、多キャンパスに渡る管理運営について新たな意思決定のあり方について検討されるべきでしょう。

2005年以来、学園関係者相互間で、厳しい対立が生じ、学園としての一体感がそこなわれたことは、わが学園にとつてきわめて不幸な出来事といわざるを得ません。学園の創造には教職員の理解と協力は欠かせません。今こそ、教職員が立命館の建学の精神「自由と清新」と教学理念「平和と民主主義」のもと、一体感をもって、ひとつの目標にむかつて協力することが強く求められています。今次の新しい総長選挙の実施により、学園関係者相互の信頼回復の道が開かれ、立命館学園で学ぶ学生・生徒、立命館学園で教え・働く教職員すべてが、新しい総長の下で、一致団結して、新しい教育研究の地平を切り開き、誰もが希望に満ちた学園創造に参加されることを、切望いたします。

以上

※この届出用紙は、総長候補者公示の際に、公報として原紙のまま掲載いたします。